



# 君たちはどう生きるか、、、 答えはまだまだ見つからない

会員 早川 賢人 (74期)

今年の夏、全く何の宣伝広告もされないまま、宮崎駿監督の最新作品「君たちはどう生きるか」が公開された。引退を宣言した巨匠が復帰してまで描きたいものとは何なのか非常に気になり、また、生まれた時からスタジオジブリ作品のVHSビデオを擦り切れるほど見て育ってきた私としては、映画館でスタジオジブリ作品が見られること自体が嬉しく、公開された週の週末には映画館に足を運んでいた。

映画の内容についての紹介は差し控えるが、私はこの作品を理解したいと思った。そのためには吉野源三郎の同名の小説に何か手がかりがあるのではないかと思い立ち、さっそく本屋でこの小説を購入した。この小説を読み始めるとすぐに小学生の時に読んだエーリヒ・ケストナーの児童小説を思い出した(ケストナーの作品はあまりに強烈に印象に残っていて、大学に入学した際に彼の作品を原文で読んでみたい一心で他の言語を一顧だにせずドイツ語を第二外国語に選択したほどだった。ちなみに、最高の教授に恵まれたのでこの選択は非常に良い選択だった)。本の構成と物語の設定、そして読者に対するメッセージが所々とても似ているのである(特に「飛ぶ教室」と「点子ちゃんとアントン」)。そして両人とも当時の全体主義の政治体制の中で弾圧され、戦後に再評価された児童小説作家である点も共通する。ケストナーは1920年代後半から活躍したドイツの人気児童小説作家だから、訳本が出回っていなかったとしても、吉野が1930年代の出版業界で仕事をしていたら、ケストナーの作品を知っていて影響を受けていたとしても不思議はない。

間接的な形ではあるが、大好きな作家の作品が大好きなスタジオジブリに題材として取り上げられているようでとても嬉しかった。先述の小説はいずれも大人

にこそ読んでほしい素晴らしい内容なので是非ご一読いただきたくご紹介する。

話が脱線したが、結論として、小説を読んでも映画の内容の理解にはほとんど役に立たなかった。ただ、ちょうど弁護士としての1年目が

怒涛のように終わったタイミングであり、これからどのような弁護士として成長していくのか、何を自分の価値としていくのかを考える良い機会になったと思う。考えるとはいっても、明確な答えはまだまだ見つからない。子供の頃は弁護士になるような人は、確固たる人生の目的に向かって突き進んでいるのだろうと思っていたが、今実際自分になってみると、目の前にある仕事で手一杯でどう生きるかなんてものは見えなくなってしまっているように感じる。

「賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。(エペソ人への手紙5:15、16)」これは私の名前の由来となった聖書の一節だ。クリスチャンの家庭に生まれた私は、この聖書の言葉に、たびたび背中を押されながら(しばしば押し潰されそうになりながら)、生きてきた。

これから続く弁護士としての人生が具体的にどんなものになるかは全く想像もできない。しかし、いつか振り返って見た時に、「私はこう生きた」という答えが見つけれれば良いなぁと期待している。



左：吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」(マガジンハウス)  
右：エーリヒ・ケストナー著、池田香代子訳「飛ぶ教室」(岩波書店)